

《罪を感じたら、神様の懐を探しに行きましょう》

今日の福音(ルカ 9:7-9)で、ヘロデはなぜ、イエス様のことが気になったのでしょうか。イエス様の噂が広まり、ヘロデの耳まで届いたからですね。ある人は、「死んだヨハネが生き返ったのだ」と言い、別の人は、「預言者の中の1人だ」と言っています。それが気になって、直接イエスという人物に会ってみたいと思ったのです。では、なぜヘロデは気になったのでしょうか。簡単に言うと、自分が洗礼者ヨハネの首をはねたからです。人間が自分の罪を感じたとき、一番初めに出る反応は怖さです。罪を犯した人が、「これは罪だ」と自分で認めることができれば、まず初めに起こる反応は怖さです。人間の弱さから出る、「罰されるのではないか」という怖さです。これは、全ての人間の弱さの一つかもしれません。

今日は、また罪について考えてみたいと思います。私たち人間は、誰でも個人的な法廷を持っています。自己法廷を言います。個人の法廷というのは、『良心』のことです。『良心』によって、これは罪だと判決をくだします。『良心』からは、逃げる場所も、避ける場所もありません。自分がしたことを、「これは罪だ。これは悪かった。」と認めてしまったら、心の中の神様からいただいた『良心』という個人的な法廷で判決をくだされます。「おまえは、罪を犯した。」と。それで怖くなります。しかし私たちは、どうしても罪を犯しながら生きています。それでは、どうすればよいのでしょうか。

皆様がよくご覧になることだと思っておりますが、レストランで赤ちゃんがうるさく騒ぐと、お母さんが叱りますね。厳しく叱ると、その赤ちゃんは大体泣き始めます。そこでお母さんが、「泣くのは、やめなさい。」と言ったら、もっと大きい声で泣きます。しかし、やがてその赤ちゃんはどうしようもなくなって、お母さんの膝に顔をうずめて泣き止みます。お母さんは、泣き止んだ赤ちゃんが可哀想になって、「いい子、いい子」としながら、軽く背中をたたきます。

これではないかと思えます。

私たちは、どうしても罪を犯してしまいます。その時の私たちの反応は、二つあります。一つは、『逃げて、隠れる。』という反応です。もうひとつは、『他にはどうしようもないから、神様の懐に行き、頭をうずめて何とかしてくださいと願おう。』と考える』反応です。私たちが選ばなければならないのは、二番目の反応です。赤ちゃんのように、お母さんの懐に頭をうずめて「何とかしてください」という心を表すことです。もし、そうではなく「逃げよう、隠れよう」とすれば、何よりも怖いことが起こります。それは、鈍くなって、感覚を失うことです。

皆様もよく分かると思いますが、子どもの時には、一匹の虫すら殺すのが痛かったでしょう。「殺してしまってもいいのか」と考えます。もちろん生まれつきの悪戯者で、全く平気で踏んで殺す子どももいます。しかし、普通私たちの心は、小さい虫でも「これを踏んだら殺してしまうのではないか」と気にします。ところが、大人になると鈍くなり、ゴキブリを見れば平気で殺虫剤をかけ、残酷に踏みつぶすようになります。それと全く同じことだと思えます。

結局一番大事なことは、自分の法廷です。自分の良心の判決です。その判決が正しく行われるかどうかは、自分の良心の形によります。もし、いけないことをしてしまったときには、まず神様のもとに行って下さい。イエス様・神様は、赤ちゃんを可哀想に思って「いい子、いい子」とするお母さんと同じような反応を見せてくださると思えます。

この世の中に、赦されない罪はありません。なぜならば、人間は神様を殺したのに、赦されたのです。そして、そのことにより、イエス様の救いが始まったのです。

皆様、大事なことは逃げることではありません。私が悪かったと思いながら、懐を探しに行くことです。そのために私たちは、イエス様が、神様が、赦してくださることを信じるべきです。もし、赦してくださらなくていつも叱るだけの神様ならば、皆様は神様を捨ててもいいのです。しかし、神様は、何でも赦してくださいます。ただしそれは、本当に自分の心を傷めながら悔い改める時、です。その時には、強く抱きしめてくださるのが、私たちが信じている神様であることをいつも意識しましょう。

何回も繰り返しますが、罰が怖くてよいことをするのは意味がありません。罰が怖いから反省するのも意味がありません。神様の愛の大きさによって、「私は本当にあなたに悪いことをしてしまいました。」と自然に思うのが悔い改めです。

ありがとうございました。